を卒業して工房に入った中村さんがその役を引き継ぐ。そうして一生氏と一緒に仕事をしていく中で、和服のショール専用だったシルクリボンでマフラーを作ったり、機械紡ぎの『紡毛糸』でストールを作るなど、本来のホームスパンと質感や風合いが異なる小物を製品化。同時に中村さんは「今の色」を作り出すため、化学染料も多く使うようになった。

こうして旬のエッセンスを取り入れた小物は、東京や大阪で行う展示会で人気を博した。そこで1980年代の半ば頃、思い切ってマフラーやストールなどの小物を専門に作りはじめたというわけだ。

「織り」を担当しているのは、中村さんの奥様・都子さんとお姉さんの裕子さんを含め5人。製品の作風を左右する「糸紡ぎ」は、以前盛岡に住んでいて現在は横浜に住む加藤裕子さんに頼んでいる。

デザインも担当している都子さんは、「デザインは染め上がった糸を見て考えることが多いんです。その点で主人は流行の色で染めたり、糸もカシミヤや紡毛糸、梳毛糸などを使うので、糸のバリエーションが豊富で助かります」とさらりと褒める。

染色液を吸って重くなった糸の束を、色ムラが出ないよう釜の染色液の中で絶えずひっくり返す作業は重労働。しかも釜には常に火が入っているとあって、中村さんの額には汗がにじむ

下は一生氏が来盛した際の記念写真。右は、太田垣晴子氏のイラストが楽しい、一生氏の誕生パーティー（世話人は石岡瑛子氏ら）のFAX招待状。「一生さんと会えたおかげで、業界の第一線で活躍する『刺激的な人たち』と出会うことができた」と中村さん

三宅一生氏との仕事は1972年から1996年までで、その間、雑誌のモデルが同工房の製品を着用することも少なくなかった。特に、1989年の「ペルマネンテシリーズ」は当時かなりの話題を呼んだ

実際、中村さんは「今の色」にこだわる。「今の色が欲しいから、女性向けのファッション誌を買ってチェックしている」「いくら伝統技術があっても『今』がないとダメだと思う」と何度も「今」という言葉を口にする姿には、時には「こだわり」以上の強い信念さえ感じられる。

現在使用する染料の8割は化学染料だが、天然染料でも現代人好みの色を出すための工夫は欠かさない。例えば、先代は乾燥させた植物を使っていたのに対し、中村さんは「色がよく出るから」とフレッシュの草木を使う。また一般的にはそれらの素材を3回まで煮出して使うが、中村さんは1回きり。もちろんコストは高くなる。「でも、色は濃い方がいいでしょ？」とにっこり。

染め上げた糸は、先代から引き継いだ「染色ノート」に記録される。約30年前に引き継いだノートはNo.10だったが、現在はNo.40。1ページの記録数に多少の違いはあるかもしれないが、それでも中村さんに代替わりして圧倒的に色のバリエーションが増えたのは明らかだ。

さらに中村さんは、時々デザインも手がけるという。「でも、俺がデザインしたものは全然売れないの」と苦笑するが、見せていただいたストールは春や夏にも羽織れそうな爽やかな配色のもの。大胆な柄も大きな特徴で、中村さんのユニークなセンスがうかがわれる。

ユニークなのはマフラーやストールだけではない。同工房には、東京在住の帽子作家や革工芸品作家とのコラボレーションから生まれたお洒落な帽子やバッグもいっぱい。工房のショールームでその可愛らしさにすっかり魅了されつつ、ふと疑問がわいてきた。長い歴史を誇る中村工房で、なぜこんなにお洒落で可愛らしい作品が生まれるのだろうか？

さらにマフラーやストールをよく見ると、「中村工房」のタグと、中村さんの名前「博行」の頭文字「ひ」を記したタグの2種類が縫い分けられている。う〜ん、なぜ？

ふだんの茶目っ気たっぷりの表情とは異なり、仕事中はかなりまじめな中村さん。染めたあとも、2〜3分乾かして水洗い、その後脱水機にかけて自然乾燥、と作業は続く

「新しい色を染める時にはドキドキする」と話す中村さん。それらを記録した染色ノートは、現在No.40を数える

中村工房